

アンドせつ

摂津市の新たな魅力を発見する「アンドせつ」では、市で輝く人々や街の魅力を不定期でお届けしていきます。

Vol.2



渡邊さんの事務所にはいろいろな人が相談事を持って訪ねてくる。インバウンドでも電話に、訪問対応にと忙しそうだった。



摂津市の誇る伝統野菜「鳥飼なす」も栽培。「鳥飼なすワングランプリ」で使用するほか、首都圏の料亭からも支持されている。



朝のミーティングで、農作業の工程をみんなで共有する。慣れた様子でそれが自分の仕事に取りかかる。

「現在どのような農作物を手がけていらっしゃいますか。」「米を1万5千kg、鳥飼なすを500kg、四季折々の野菜を500kgほど育てています。他にも、JA北大阪からの受託業務

に仲間とともに、現在進行形でさまざまなアイデアや取り組みを模索しています。」

農業の現実を伝えていく

で耕耘、田植えなどをしています。」「農業を学びたい人の受け入れも積極的に行っています。例えば『SFC※』の卒業生は年間2~3人ほど受け入れています。また、大阪府農政室からも依頼を受け、就農を学びたい人を受け入れています。今年度には3人が参加しており、年齢層は20代から50代まで幅広いでいます。医療従事者や飲食店経営者など、これまでの経験や業種もさまざま。その背景には『自分で育てた農作物を食べたい』という強い思いがあります。都市部で農業を実際に体

験できる場は限られている中、鳥飼八町は都市部に近くアクセスが良いため、学ぶには適した環境なんですよ。」

※ Small Farmers College (スマールファーマーズカレッジ / 略称 SFC) は、週末だけで本格的な野菜栽培の技術と知識を基礎から体系的に学べる農学校

「鳥飼八町という土地で農業を営む中で、地域が抱える課題や問題についてどのように感じていますか。」「鳥飼八町も、他の地域と同様に高齢化や後継ぎ問題といった課題

を抱えています。周囲には兼業農家が多く、専業農家として生計を立てるために、米作りの場合だと約20万kgほどの田んぼが必要になります。それだけ広大な土地での米作りは現実的に厳しく、農業で食べていくことは難しいのです。」「私のところに学びに来る若者には、農業を取り巻く厳しい現実をしっかりと伝えるようにしています。特に農業をゼロから始める場合、機材などの初期投資に約20万円ほどかかるため、まずは兼業農家としてのスタートをおすすめしています。日本の農業全体が厳



渡邊 勝彦さん

昭和31年摂津市生まれ摂津市育ち。両親は農業を営んでおり、幼い頃から農業に触れて育つ。大手ハウスメーカーの内定を辞退して昭和54年摂津市役所に技術職(土木職)として入庁。市役所では上下水道事業などに尽力。平成28年に退職。令和5年から農業委員会会長を務める。令和5年、㈱アグリズム摂津を設立。農業を次世代につなげる活動などを続けている。

せつつの農業を盛り上げたい

「鳥飼八町で長く農業につなげられてきましたが、令和5年3月に「株式会社アグリズム摂津」を設立されました。まずは、法人化を決断されたきっかけやその背景について教えてください。」「摂津の農業を次の世代へつなげていきたいと思い、法人化を決断しました。私は鳥飼八町で生まれ育ち、幼い頃から農業に親しんできました。また、市役所勤務の経験が長いこともあり、市が抱える課題について多少理解しています。今は農業委員会会長という立場もあり、ここで地域のためにがんばる使命があると感じています。」

問合せ 広報課 06
(63883) 5801-806



鳥飼八町は市街地に近い場所で、田園風景が広がる。

しい状況にある」と伝えるのも、ある意味では使命だと考えています。」

「また、鳥飼八町は市街化調整区域※であるため、農地として活用するしかない課題があります。一方でこのエリアは都市部に近いという大きなメリットもあるため、そうした利点を生かした取り組みを模索しています。その一環として、JA北大阪と共同で『WE米®』という商品を手がけています。このWE米®は腸内環境の改善が期待できる商品です。市内の小中学校の給食用パンにも活用されており、子どもたちからも『おいしい!』という声が多く寄せられているのが非常にうれしいです。こうした取り組みを通じて地域とのつながりをさらに深めていきたいと思っています。」

※市街化調整区域とは、無秩序な市街化を抑制し、農地や緑地を保全するため、開発が制限される区域

「私は、農業を通じて実現したい夢やビジョンがあれば教えてください。」

地産地消の持つ力

100%摂津産に

実際に日光の下で体を動かす農業は、さまざまな良い影響を与えてくれるようです。ここに来る方々の中には、「ミユキ」ケーションを取るのが少し苦手な方もいらっしゃいます。それでも、農業のような「ものづくり」の作業をしていると、自然と会話が生まれます。みんなで同じ作業に取り組むことが、会話を作るきっかけや流れを作り、変に気負わずに交流ができるのでしょうか。」

「隣にあるデイサービスの利用者さんたちも畑仕事を楽しんでいらっしゃいます。作物が少しづつ成



市内で活動する「ゆびまる」が廃材ペンキを再利用して、手がけたシャッターアート。

農業で叶える 鳥飼八町の未来

「最後に、農業を通じてどのような

長していく様子がいいんでしょうか。農業という活動が障害者や高齢者にとって、心身の健維持にもつながっていることを実感しています。」

「米の収穫後の畠では、これからレンゲの花が咲き誇るということですが、この土地なりではの魅力や風景についても伺いたいです。」

「はい、米の収穫が終わった後には、レンゲの種を蒔いています。そして春になると、畠一面にレンゲの花が咲き誇り、まさに『映えスポット』に。ぜひ多くの方々に見に来ていただけたらと思っています。レンゲの花を活用する養蜂も予定しています。実は以前、レンゲ蜂蜜が品質だつたんですよ。」

「咲き終わった後のレンゲは次の農作物の肥料として活用されます。レンゲは自然に土へと還り、次のシーズンの米を育てるための栄養を土壤に与えてくれます。私が目指す『循環型の農業』の形です。」

可能性を見出そうとされているのか、お考えをお聞かせください。「新事業として『お野菜配達便』を始めます。市内で収穫した新鮮な野菜を地元の飲食店に直接配送することで、地産地消の取り組みを広げたいのです。この仕組みに賛同していただける飲食店の皆さんにお声がけをしながら、地域全体で農産物の価値を共有できる環境を築きたいと考えています。」

「また、鳥飼八町1丁目では、WE米®をはじめとする地元の米や鳥飼なすなどの農作物を積極的に栽培しています。一方で、鳥飼八町2丁目では市民農園を中心としたさまざまな人が集まる場所を構想中です。この土地を有効活用し、地域の人々の交流や農業体験を通じて、農業の持つ社会的な価値を広げる場を作りたいと思っています。」



春にはレンゲ畠が広がる。「畠田」医学としてやっています」と渡邊さん。

シティプロモーション
サイトで他の人々の
インタビューアー記事を
掲載しています▼



題について考える機会が増えたのではないか。そうした流れもあり、私自身、地産地消に対する思いをさらに強く抱くようになりました。」

「いつか米の有機栽培を成功させたいです。一度挑戦したことがありましたが、結果は散々でしたね。しかし、それ以降経験を重ねてきましたので、あきらめずに、化学肥料を使わない循環型の肥料で栽培する方法を探っていきたいです。」



鳥飼東小学校の児童が植え付けた白菜。渡邊さんは「地産地消の取り組みを理解してくれたら」と目を細める。



母屋を改装してデイサービスとして活用。庭や畠を利用して心や体の健康を回復・向上させる園芸療法を取り入れている。施設名「満さん家」は、渡邊さんの亡母に由来。

農福連携、農業と福祉がつながる

「これまでの農業にとどまらず、新たな農業の形を模索し続けることで、地域や社会全体にとって新しい価値を提供していきたいと考えています。」

